

史図書出版のあり方を示唆する書でもある。

(鈴木 則子)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五  
一七五一—一七八一、二〇〇四年三月、A五判、七四頁、  
本体価格二五〇〇円〕

壬生町歴史民俗資料館

『みぶ蘭学人あらわる』

徳川将軍の日光参詣に使われた日光道中壬生通りをもつ栃  
木県壬生町では、約十年にわたって町立歴史民俗資料館が中  
心となって、蘭学を学び奨励した人々も歩いたこの道を軸に、  
郷土の先覚者の息吹を新しくほり起こしてきた。このたびそ  
れらの業績をまとめてパンフレット「みぶ蘭学人あらわる」  
を刊行した。

二十二頁の小冊子ながら藩主と学問、西洋医学の導入者・  
斎藤玄昌、壬生の解剖、種痘実施の医人、蘭学通りの名医た  
ちなど、医史にかかわる史実がコンパクトにもりこまれ、非  
常に有益な出版物となっている。

(中西 淳朗)

〔壬生町歴史民俗資料館、〒三三二—〇三二五 栃木県壬生  
町本九一—八—三三三、電話〇二八二—八—二八五四四、一

冊・二〇〇円、送料は三冊まで一八〇円、現金書留もしくは  
郵便振替で申込)

日本学校保健会 編

『日本学校保健会八十年史』

学校保健の淵源は明治三十一年の勅令「全国の公立学校に  
学校医を置く」にある。明治初期にはコレラ、天然痘等の伝  
染病予防、学校設備の衛生、生徒らの休退学、病弱の防止、  
後期にいたり学校衛生顧問の活動、学校清潔法、学校伝染病  
予防、身体検査、学校医などの諸規定が公布され学校衛生の  
基礎が確立された。この間、最も功績のあったのは、明治二  
十四年文部省学校衛生事項取調嘱託に命ぜられた三島通良で  
ある。明治三十六年に雑誌「学校衛生」が創刊されている。

大正期となり、同二年に大日本学校衛生協会が結成され  
「日本学校衛生」を機関誌として創刊し、学校衛生の啓蒙に  
供した。また、この年には第一回学校衛生協議会を開催し、  
学校衛生の組織的活動基盤を確立した。

本書では明治大正期については略述されており、掘り下  
げて検索するときには学制発布百年を記念して発刊された  
『学校保健百年史』(昭和四七年刊)に拠らねばならない。

大正九年に大日本衛生協会を母体として帝国学校衛生会  
が発展的に誕生した。敗戦後の昭和二十一年には日本学校  
衛生会となり、同二十九年に日本学校保健会となり、この

組織は時代の変革に即応して活動をを進め、昭和六十一年には日本学校保健会六十年史をまとめ、その学校衛生の成果をまとめている。この組織の労を高く評価したい。

ところで、本書の内容であるが、つぎの七編から構成されている。

一、概況 二、帝国学校衛生会の成立と発展、運営 三、日本学校保健会の成立と発展 四、財政 五、関係団体の沿革と日本学校保健会 六、加盟学校保健会の推移と現状 七、新たな学校保健の課題と日本学校保健会、付録の約五五〇頁を超える大冊である。

評者の記憶をたどると、小学校時代には一人の校医がおり、身体検査の際には身長、体重、胸囲の身体発育をはじめ視力、聴力、歯牙発育、胸部の打聴診など受け、主としてその範囲の注意を受けたに過ぎないが現代の子供達はそれぞれの専門医により、より詳細な注意を受け、さらに栄養士、保健師らから栄養指導を受けている。現に評者らの少年時代には脚気病と診断された子供は少なくなかった。現代では脚気は子供らには無縁のようであるが、今や生活習慣病の予備軍といわれ、歯科の分野では歯周病を持つ子供は珍しくないという。

本書を通読しつつ、現代日本人の精神文明を捨てて物質文明に浸る哀れな姿を彷彿とさせる。従って、学校保健に課せられた使命には計り知れないものがある。しかし、このことの警鐘を乱打する者はまだ現れない。それだけ、日本人は利己的になってしまったのであろうか。せめて本書がこの役目

を担ってほしいと願わずにはおれない。

(寺畑 喜朔)

〔平成十七年三月二五日発行、発行者(財)日本学校保健会  
東京都港区虎ノ門二―三―一七 電話〇三―三五〇一―〇九  
六八 A四判 五五三頁〕

篠田 達明 著

『徳川將軍家十五代のカルテ』

徳川將軍家初代の家康から、十五代の慶喜迄の死因分析をおこなっている。

著者の篠田達明氏は、医師にして作家、旧著「大御所の献上品」や「法王庁の避妊法」などによつて直木賞の候補になったことがあるというだけあつて、達意の文で、一気に読ませる。新潮新書の一冊。一八八頁の手軽に読める本。医史学関係者にお薦めしたい。

初代の家康は胃ガンから始めて、最後の十五代は急性肺炎で死んだというように、多くの文献を渉猟した結果から死因の考察を行い、その間にいろいろな挿話を入れて結構楽しく読ませる。

一般に貴人の日常生活は隠されて公表されないのである。將軍も江戸城の奥にあつて、一般人には顔を見せない。周囲の者にも箝口令が敷かれていて公表されない。まして將軍の発病とか死亡のことは社会的にも大きな影響を与え